合成貝紫染色の現代ファッションへの応用

An Application of Synthetic Tyrian Purple Dyeing to Modern Fashion Design

小川 裕子*、梅田 悠希**、鎌倉 明香**、髙木 美希**、三富 あすみ**
Yuko Ogawa, Yuki Umeda, Sayaka Kamakura, Miki Takagi, Asumi Mitomi

要旨

貝紫とは、アクキガイ科に属する貝のパープル腺から採取した染料であり、これを用いた染色は古来より地中海沿岸や中南米で行われてきた。美しい紫の発色に加え、染料の希少性ゆえに高貴な身分の者の色とされ、時の権力者らが好んで着用した記録が残っている。現在では貝紫の研究も進み、合成貝紫染料の開発に成功している。しかし、我々の衣服の中に貝紫染色を見ることは殆どない。本研究では、合成貝紫染料を用いた現代のファッションデザインを提案することで貝紫染色の可能性を拡げ、また認知度の向上を目指した。制作の前段階として、貝紫の歴史と現状を把握すべく、文献やインターネット、聞き取りにより調査を行った。その結果、貝紫染色工房・商品の規模は小さく、特にファッションの流通には殆ど乗っていない現状が明らかとなった。これらを踏まえ、5体の衣服を制作した。それらに対しファッションデザイナーらに評価を求め、デザイン上の細かな修正点や今後の課題等、客観的評価を得ることができた。最終的に、5体の衣服作品に染織工芸作品を加えての合成貝紫の展示会を実施した。

●キーワード：合成貝紫（synthetic tyrian purple）／現代ファッション（modern fashion）／染色（dyeing）

Ⅰ　はじめに

貝紫はアクキガイ科に属する貝のパープル腺から採取した染料であり、これを用いた染色は地中海沿岸や中南米、そして日本等、古来より広範囲に渡って行われた形跡が残されている。一説には1gの貝紫染料を得るために2000個もの貝を必要とすると言われている[1)]。その希少性ゆえに貴重な染料とされ、しばしば歴史上の高貴な身分の衣装に彩りを添えており、貝紫は別名「帝王紫」とも呼ばれる。

貝紫の染色方法は時代や地域によって様々であり、貝紫の研究は多く行われている。古の染めを再現しようとする試み[2)]や、貝の種類や染色品の用途を探るフィールド調査[3)]、また化学的視点からの研究[4)]等、数多くの研究が果たされている。

このように時代や地域を越えて様々な人を魅了してきた貝紫染色であるが、染織工芸に利用されながらも、今日のファッションの中には殆ど見当たらない。つまり、貝紫染色とファッションとはかけ離れた状態にある。理由として、貝紫染色は大量の貝が必要であり、容易な染色方法でないためと考えられる。しかし化学的研究の成果として貝紫染料の合成に成功しており[5)]、市販化には至らないまでも、比較的安価かつ大量に合成染料を作り出すことが可能となりつつある。合成された染料を染色に用いることで、多くの人を魅了する貝紫を現代のファッションに繋げていくことができるだろう。

本研究では、貝紫染色の可能性を拡げることを目的とし、合成貝紫染色のファッションへの応用を目指すことにする。そのために、まず貝紫の歴史を把握した上で、日本における貝紫染色をとりまく現状を調査する。これを受け、合成貝紫染色を用いた現代のファッションデザインを提案し、作品はファッションデザイナーらの評価を受けることとした。最終的に、合成貝紫染色の展示会を実施し、広く一般に向けＰＲすることを試みた。

Ⅱ　貝紫染色の歴史

1．世界各地にみる貝紫染色

（1）地中海沿岸

貝紫染色の歴史は長い。紀元前13世紀の壺に貝紫の付着が見られたことから、この時期に行われていたことはほぼ確実であろう。また紀元前17世紀頃にはクレタ

*本学助教、ファッションデザイン
**本学助手、ファッションデザイン

島で行われていたとも言われている[6]。発祥時期は定かではないが、地中海沿岸では古代から貝が染色に用いられ、中でも都市国家フェニキアの首都テュロスはその中心地であったと言われる。フェニキアは地中海での交易で栄えた国家である。貝紫染色された布や糸はこの土地の特産品であり、交易品の一つとして扱われた。土地の名にちなんで、貝紫は英語で Tyrian purple という名がつけられている。そうして一つの産業として発展する中で、各地に染色工場が建てられ、貝紫染色が地中海沿岸の各地へ拡がっていったのである[7]。貝紫は染料の希少性に加え、堅牢度の高さから、各地において特権階級の占有色となっていった。アケメネス朝ペルシアのダリウス1世や、マケドニア王国のアレクサンドロス大王も愛用したと言われる。その後、古代ローマの時代においても貝紫の愛好は留まることを知らない。カエサルは貝紫色の衣を纏い権力を誇示し、またアントニウスがエジプトからクレオパトラを呼び寄せた際、金銀で飾り立てられた船には、貝紫色の帆が張られていた[8]。ローマ帝国となってからも皇帝らは貝紫色を尊い色として扱い、中でも暴君として知られるネロは、貝紫染色された衣服の着用者のみならず、販売した者までを処刑したほどの熱狂ぶりであった。395年にローマが東西に分裂した後も、貝紫色は皇帝の色として東ローマ帝国に引き継がれる。サン・ヴィターレ教会のモザイク画からは、ユスティニアヌス帝とテオドラ皇后が貝紫色のマントを着用している様子を見ることができる。

一方キリスト教の拡がりと共に、聖職者の僧衣や礼拝堂の幕、羊皮紙製の聖書等といった宗教美術の中にも貝紫色が現れている[9]。世俗における高貴な色が信仰心と結びつき、権力としての色ではなく、単純に尊い色として用いられたことが推測される。

このように貝紫はしばしば歴史上にその名を刻む染色であったが、1453年の東ローマ帝国の滅亡と共に、貝紫染色の歴史に終止符が打たれた。現在、当時の染色工程に関する記録は殆ど見つかっていない。これは染料の貴重さ故、工程が門外不出として秘密裏に受け継がれていったためと考えられる。

（2）中南米

中南米においても貝紫染色は行われている。

ペルーでは、貝紫染色された裂（きれ）がいくつか出土しており、貝紫染色が長きに渡って行われてきたことがわかる[10]。最も古いものは、紀元前1100年頃、プレインカ文明のチャビン文化のもので、アメリカのテキスタイルミュージアムが所蔵している。これは白地の木綿の断片で、文様部分に貝紫染色が施されている。以降、紀元前1世紀から西暦200年頃、当時はナスカ文化の時代であるが、いくつかの裂が存在する。手の形を模した図案に水玉が散りばめられた文様が描かれた裂や、染色された糸で幾何学文様を編みだした魚網、ナスカ文化の神を散りばめた手描き染め等、様々な使用場面や、手法でもって貝紫染色が行われていたことがわかる。その後、ワリ文化、インカ文化と時代が下ってもなお貝紫染色の形跡は残っており、16世紀半ばにスペインの侵略によってインカ帝国が滅びるまで、貝紫染色が盛んに行われていたことがわかる。

メキシコでもまた、貝紫染色の形跡が残されている[11]。マヤ文化の古典期である600～900年頃の裂には、貝紫の色を見ることができる。しかしペルーのように紀元前の古い裂が多数出土しているわけではなく、その歴史は未知の部分が多い。そして、オアハカ州のミステカ族が住むドン・ルイス村には貝紫染色が今なお伝えられている。特徴的な縞模様の生地で作られた女性のスカートは、貝紫色に染めた糸と、異なる2色の糸を加えた計3色の糸で織り上げられたものである[12]。

貝から染料となる色素を得るために、地中海沿岸ではアクキガイ科の貝の中でもヘマストマやツロツブリ等を用い[13]、貝を割ってパープル腺を取り出す手法をとる[14]。それに対し中南米では口の大きく開いたアワビモドキやヒメサラレイシ等の貝を用いる。貝に刺激を与えて色素を抽出して糸に摺りつけていく手法であり、貝を割らず生かしたまま染色することができる[15]。現在も貝紫染色の伝統を継承するメキシコでは、政府によって染料の元となる貝や染色が行われる海岸が保護されている[16]。

（3）日本

冠位十二階の最高位が濃い紫色であることからもわかるように、日本の歴史上においても紫は高貴な色である。しかしそれらの紫は紫根による染色が主流である。貝紫染色の形跡は1980年代まで発見されなかったため、日本での貝紫染色は存在しないと考えられていた。しかし1989年の吉野ヶ里遺跡発掘において、遺跡から埋葬時期の異なる複数の絹織物が出土した。佐賀県教育委員会が調査を行った結果、それらの絹織物から貝紫の色素が検出された[17]。その他にも、伊勢志摩地方の海女たちが貝から得た色素で、手拭いに護符の文様や名前を描く習慣があったことがわかってきた[18]。いずれもごく一部

ではあるが、日本でも貝紫染色が行われていたのである。

2．貝紫染料の合成に向けて

化学的視点で貝紫を取り上げたのは、1685年のWilliam Coleが最初と言われている[19]。1909年にFriedlanderによって化学構造が明らかとなり[20]、貝紫はインジゴに臭素置換した6,6'－ジブロモインジゴであるとされている(図1)[21]。貝紫と藍の化学式は非常に酷似しており、臭素の有無のみが異なる点である。

昨今、藍の色素は化学合成され市販されている。しかし、貝紫の合成品は市販されていない。その理由として、第一に高価であることが挙げられる。原料試薬の価格は高く、また合成も手間のかかることがわかっている[22]。第二に、光の影響を受けて色味が変化することが考えられる。そうした影響は商品化した際に致命的であると考えられる。

しかし現在、合成方法は改良され、以前に比べ安価に染料を得ることが可能となった。光の影響についても、暗室での染色、または最も影響を受けない波長となる黄色や赤色のセロハンで照明を遮光することで色味の変化を防ぐ等の手段が講じられている[23]。

貝紫染色の陰には、従来大量の貝が必要であり、採取に関わる労力やコスト、生態系への影響等、懸念される事項があった。合成貝紫による染色は、貝紫の美しさはそのままに、従来の貝紫の懸念事項を解決することが可能であり、長く人々を魅了してきた貝紫を現在にも伝えていくためには、非常に有効な手段と言える。現在、合成貝紫染料の商品化実現には至っていないが、今後の研究開発に期待したい。

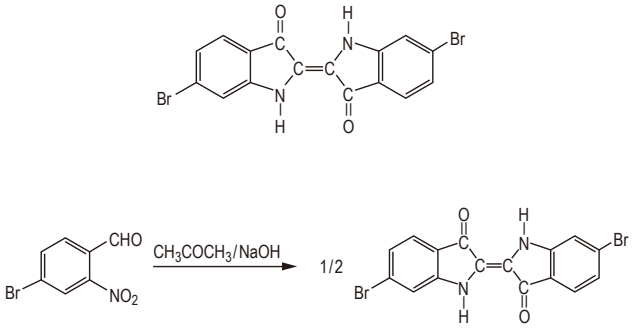

図1　貝紫の化学式
上：6,6'－ジブロモインジゴ　下：アルデヒドからの合成工程

Ⅲ　現代日本における貝紫染色

前述の通り、貝紫染色は長い歴史を有する。しかし、化学染料が主流の昨今、頻繁に目にする染色方法でないことは事実である。現代日本において貝紫染色はどのように存在しているのか、雑誌記事やインターネットからその一端を探った。

1．染色工房

貝紫染色を専門に行う工房は少なく、調査の結果、貝紫染色を積極的に行っている工房として以下3軒が存在した。

日本初の貝紫染色を専門に請け負う染色工房は、三重県伊賀上野にある「稲岡染色店」と言われる[24]。これは染色家稲岡良彦による工房であり、小ロットから染色依頼を受け、その他にも貝紫染色品の販売も行っている。

宮崎県にある「綾の手紬染織工房」は、1973年から開業している工房である。主宰の秋山眞和は現代の名工に選出され、また伝統工芸士認定された染織家である。その高い技量から、天皇皇后両陛下の御前実演や、皇后陛下への染織品の献上等も行っている。この工房では、蚕の飼育から、糸引き、染色、織まで一貫して手仕事で行い、中でも染色においては藍と貝紫を中心に扱っている。

京都にある「染司よしおか」は江戸時代から続く染色工房であり、現在は5代目吉岡幸雄が当主である。先代は貝紫研究の第一人者として知られる吉岡常雄である。貝紫染色のほか、植物染料を用いる等、天然染料による豊かな色彩表現に定評がある。東大寺や薬師寺、石清水八幡宮等といった寺社での祭礼にて、飾りや装束を献じている。

この他にも貝紫染色を行った形跡のある工房はいくつか存在したが、年間を通して繰り返し行う工房は少ない。電話取材をしてみると、ある工房では顧客からの要望に応じて糸や生地を貝紫染色することもあるが、積極的には行っていないという。その理由として、染料が豊富な現在では近い色味を出せる染料が他にあるということ、また貝紫を専門にした場合貝が枯渇してしまう恐れがあるということを挙げていた。

2．染色品

（1）調査方法

貝紫染色された商品にはどのようなものがあるのだろうか。街頭での市場調査では殆ど見かけないため、インターネット上で「貝紫」を謳う商品を検索し、商品の種類やどのように染色されているかについて探ることとした。インターネットでは各地のコレクション情報が雑誌

よりも早く世界中に配信され、また国内若手ブランドのネット販売も盛んである[25)]。ファッションの最新情報を知る上で、インターネットは欠かせないツールであり、その恩恵は計り知れない。しかしインターネットによる調査は、情報の信憑性や事実の精査等、危うさを伴う。したがって、個人ではなく法人のインターネットショッピングサイトを中心に扱い、加えて、貝紫染料を製造し販売する会社へ問い合わせを行い、販売先や使用される商品について伺った。

（2）調査結果；商品の販売

インターネットにて貝紫を謳う商品を検索した結果、その殆どが和装関連の商品であった。例えば、帯、帯締め、手提げ袋といった小物類が殆どで、その他にはストール等が見られた（図2）。説明文や画像からは基本的に先染めであることが読み取れ、全面、或いは文様の一部として織られている。

より詳細な商品情報を得るべく、販売元への聞き取り調査を試みたが、中古商品や売切れ、或いは守秘義務等により、製造に関する情報は明らかにならなかった。しかし、聞き取り調査に応じた販売元からは貝紫に対する認識として、貝紫染色品は希少であること、帯締めのような小物が多いこと、反物は市場に出回っている可能性はあるが多くなく、扱ったことはない、との回答が得られた。

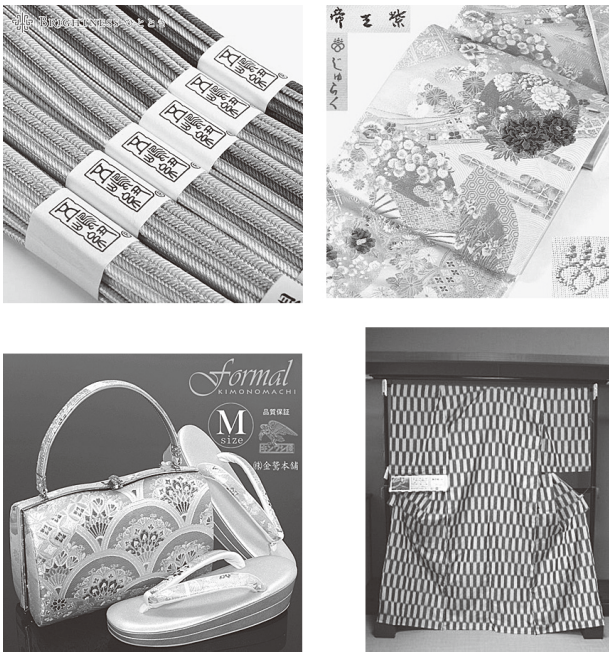

図２　貝紫を謳う商品の一例

左上：http://www.hitotoki-online.com/item/11308.html
右上：http://www.hitotoki-online.com/item/15832.html
左下：http://item.rakuten.co.jp/kimonomachi/026199/
右下：http://www.kimono-bito.com/gds/0393/003719.htm
（いずれも閲覧日：2013年9月24日）

（3）調査結果；貝紫染料の販売

貝紫染料販売元への聞き取り調査を行った。2社共にほぼ同様の回答が得られた。

まず販売先について、購入者の大半はセミプロの工芸作家や一般人とのことである。用途としては、一部スカートやストールといった衣料を染める人もいるが、基本的には工芸品に用いられることが多いようである。ごく稀に布や糸の製造者が買い求める場合もあるが、小ロットであり、流通する商品に使われるとは考えにくい。ただし、粉末染料は手描き友禅に適しており、工芸作品の延長として、和装用品に用いられる可能性も示唆していた。

調査を通し、貝紫染料の販売はあくまでも小規模であることが明らかとなった。両社共に粉末染料は1gにつき8000円とかなり高価な上、仕上がりが天候に左右されたり、染め斑ができやすかったりと、染色方法の難易度も高い。また、原料となる貝を採る方法については明確な返答は得られなかったが、「容易ではない」とのことである。こうしたことから、貝紫染料そのものが流通に適していないと考えられ、結果として、貝紫染色された商品がごく少数であることに繋がったと言える。

（4）現在の貝紫染色品

今回インターネットでの調査を行ったが、調査手法の特性上、全貌を把握するには至らなかった。しかし、インターネット上に掲載された貝紫染色品は、数量・認知度共に低いことが推察される。そして掲載された商品の殆どが和装関連の小物商品であること、この他に染色工芸品としての使用も見られるだけであることがわかった。このように貝紫染色品は、洋装すなわち現代のファッションとして流通しておらず、現代人にとっては触れる機会がかなり制限されていると言える。

3．流通以外の取り組み

調査を行う中で、流通以外にも貝紫染色に対する取り組みがあることが明らかとなった。三重県鳥羽市にある海の博物館は、漁師や海女、海辺に住まう人々と海の関わりに注目した博物館である。そこでは、貝の採取から染色までを体験するプログラムを開催している。コースター程度の大きさの布に型紙で染めていくといった平易な内容であり、ウェブサイト上の写真からは子供たちが参加する様子も見受けられる。

こうした貝紫染色体験は愛知県西尾市一色町の佐久島でも行われている。町おこしの一環として、佐久島の漁業資源であるアカニシ貝を用い、観光客に体験教室を開

講している。

また、千葉県香取市にある夢紫美術館は、貝紫染色された反物、染色工芸品を収蔵する国内唯一の私設美術館である。希望に応じて講演や実演を行っている。

こうした各所での様々な取り組みの実施は、貝紫が今なお多くの人の興味を引くことを示していると言えるだろう。

Ⅳ　現代ファッションへの応用

１．デザインの方向性

先の調査で、貝紫染色が現代ファッションに用いられていないことが明らかとなった。染料の希少性や価格の問題等、商品化には問題が山積である。しかし合成貝紫染料が開発され、今後更に研究が進むことで、貝紫の美しい色彩を有した衣服が市場に出回る可能性はある。そこで、未来への布石として、現代人が貝紫を身近に感じ、興味関心を抱くよう、現代ファッションとして表現することを試みた。

デザインから染色、縫製まで筆者ら５名が行い、５体の衣服を制作した。デザインにあたっては、以下に示すテーマを設け、解釈や表出方法は各人の判断に委ねることとした。テーマは次の三点である。第一に、貝紫染色の美しさを全面に打ち出すことである。これは本論の目的そのものと言える。第二に、各人の独創性が表出されることである。最先端のファッションデザイナーは、それぞれの創造性を遺憾なく発揮することで、多くの人を惹きつけている。独創性は優れた作品作りにおいて欠かせない要素であることは明白である。そして第三に、時代の感覚を意識することである。今回制作するのは、あくまでもファッションデザインであり、アート作品や工芸作品ではない。ファッションは時代と共にあるものであり[26]、追随するにせよ、あえて無視するにせよ、無意識下でデザインを行うことは不可能であろうと考える。

そして完成した作品は、ファッションデザイナー数名から評価を受けた。実際に商品化する場合であれば一般人の声を定量的に評価することが望ましいだろう。しかし今回は人々の興味関心の喚起が目的である。ショーや展示会において人の目を惹きつけ、トレンドという潮流を作るという点において、ファッションデザイナーは我々の目指す物作りに最も近い存在である。そこで彼らから直接評価を得ることで、作品の改良やこの後の展示会での見せ方に活かすこととした。

２．作品

（１）デザイン１；和と洋を融合したデザイン（図３）

前述の通り、貝紫染色は和装に用いられることが多い。今日の和装は打ち合わせがぴったりとした着装方法であるが、時代を遡ると、打ち合わせがゆったりとした小袖を風俗画や浮世絵を通して見ることができる。そうしたゆるやかなドレープ感は現在の和装というよりはむしろ、洋服に近い印象すら与える。デザイン１はゆったりとした打合せという和装と洋装の共通項を元にデザインされたもので、和装における貝紫のイメージをそのままに、自然と洋装へと転換することが意図されたワンピースである。

打ち合わせに加え、その流れに沿った生地の切り替えは、室町時代後期の小袖の着想を想起させるディテールとなっており、また背面には帯に裾をたくし上げたようなディテールも配している。

生地は２種類の濃淡の異なるシルクオックスフォードとシルク楊柳の生地を用いて、一着で重ねの雰囲気を醸し出すデザインとなっている。

（２）デザイン２；１枚のパターンから成るデザイン（図４）

このデザインは１枚のパターンから成るワンピースであり、天衣無縫をテーマに縫い目を最小限に抑え、布をただ纏ったような形で構成されている。一風変わった袖の形状は、どのような構成になっているのか、見る者の知的好奇心を掻き立てる効果を狙っている。当初は袖下の生地分量が多く、そのために「1 枚の布」という印象がより強く表れたフォルムであった。しかしファッションデザイナーの評価は、「そうしたコンセプトが、結果として着る人の美しさに繋がらないのでは意味がない」との指摘であり、改良を加えることとした。結果、袖下の生地分量を半分程度に減らすことで、コンセプトとフォルムの美しさを両立した。

生地は綿・ポリエステル混紡の生地を用いている。やや淡い紫で、１枚のパターンの中で殆ど斑なく染め上げることに成功している。

（３）デザイン３；身体と衣服の間の空間に着目したデザイン（図５）

コンセプトは身体と衣服の間の空間である。デザインの中で身体、衣服の要素を強調し、その間にある空間を再認識させることがこのデザインの目的である。ドレープのある重めの生地は、身体にフィットした土台のドレスに肩甲骨のあたりで縫い合わせられ、肩を経由し、自

然に下へ垂れている。この生地は途中、前身頃のウエスト部分で土台のドレスに数か所縫い合わせられ、胸のふくらみ、臀部の丸み等の身体の形を浮かび上がらせるポイントを形成している。振らせた生地の自然な動きとフィットしたドレスの間に生まれた空間は、見る者に身体や衣服の再認識を促すことができる。またこのデザインは、前面からはロングドレスに見えるが土台のドレスは膝丈である為、見た目よりも気軽に着用することができる。

生地は前身頃に濃く染め上げたシルクダブルクレープ、身体にフィットしたドレスに黒のウールジョーゼットダブルフェイスと対比的な素材使いをしている。

（4）デザイン４；トレンドを取り入れ時代に即したデザイン（図６）

デザイン４はブラウスとペンシルスカートのセットアップで、５体のデザインのうち最もリアルクローズに近い。貝紫染色した生地で作られたブラウスは、着る人を選ばないベーシックな作りであるが、肩の部分で布が跳ね上がり、フリルとも袖ともつかない形状となっている。このディテールは、シンプルなデザインの中でフェミニンでありかつユーモアを感じさせる要素となっている。なお、当初袖部分はフレンチスリーブであった。しかしファッションデザイナーの評価では、「かっちりした作りというのも悪くないが、どこかで大胆な遊びを入れるとよいのではないか」との指摘があり、改良の後に生まれたディテールである。

ブラウスを引き立てるシンプルな紺のスカートは、制作時の 2012－13 年秋冬のトレンドである[27] ペンシルスカートを合わせている。

（5）デザイン５；布の表情を生かし、染色の美しさを全面に打ち出したデザイン（図７）

デザイン５は、布の表情に着目し、空気を多く含んだ二重仕立てのトップスとロングスカートのセットアップである。このトップスは５体の中で最も濃い貝紫色で染色されている。素材は光沢のあるシルクサテンオーガンジーで、染色の際、斑にならないよう丹念に刷毛で染料を馴染ませることで、美しい染め上がりに成功している。こうした生地と貝紫色の美しさを全面に出すことがこのデザインの目的である。トップスは生地の張りを生かし、ウエストでランダムなタックを複数とることで、空気を含み自然と身体から離れる形状としている。布の端は、切りっぱなしにすることで余計な重さが加わらず、軽やかな印象を与えている。また、下に重ねた布はやや光沢のある麻を用い、濃い藍色と重ねることで、貝紫色を際立たせ、奥行きが感じられる効果を狙った。より立体感を出すための工夫として、ウエストを紐でくくるスタイリングとしている。

３．ファッションデザイナーからの評価

５体の作品は現在国内で活躍するファッションデザイナーらの評価を受けた。年齢は 30 代から 50 代で、それぞれ自身のブランドを持ち、東京を拠点に活動するデザイナーらである。なお前述の通り、デザイン 2、4 は一部のデザイナーからのアドバイスを受けて、生地分量や袖の形状の修正を既に加えている。

作品一つ一つの評価は、「優れている」「素敵」といった高評価から、「いまいちである」といった辛辣な評価まで様々であった。中でも、デザイン３は途中を縫いとめたことによるドレープのアクセントが高評価を得、またデザイン２の袖の形状は「可愛い」という声から「中途半端」という様々な意見があり、賛否両論の評価であった。こうした評価には当然デザイナーの趣味嗜好も多分に影響していると推察されるが、明瞭なデザインポイントの存在は他者の目を惹きつけるために重要なものであることがわかる。

そして全体への評価として、細部にこだわりすぎて、服という全体像が捉えられていない、或いは、細部への詰めが甘い、との意見であった。またあるデザイナーは貝紫染色以前に、紫色そのものの印象がミセスやシニアといった年齢層の高い印象があると指摘し、若いデザインを強く意識しないと若者には受け入れ難いのではないか、との指摘であった。

以上のように、ファッションデザイナーからの作品に対する客観的評価は「服をどう捉えるか」「デザインをどのようにしてまとめるか」といった根本的な視点でのアドバイスであり、弛まぬ感性と技術の研磨が重要であるとの指摘であると受け止める。

Ⅴ　展示会による合成貝紫染織品のＰＲ

１．実施概要

前項では貝紫染色の美しさを現代のファッションとして提案するべく作品制作を行った。それらの制作発表と共に、合成貝紫研究の進展をＰＲすべく、展示会「貝紫展―合成貝紫による染織と作品制作―」を実施した（図8）[28]。場所は渋谷区文化総合センター大和田内 11 階の文化ファッションインキュベーションの一画である。文化ファッションインキュベーションは、学校法人文化学

園が運営する施設で、若手ファッションデザイナーへのアトリエ賃貸や、展示会やショー等のプレゼンテーションの場の提供等を行っている。そうしたファッションの発信地を目指す場所である点と、渋谷駅から5分という好立地の点より、この場での開催を決定した。

開催日は2013年1月24日（木）から26日（土）の3日間で、10時から18時まで（最終日は17時まで）とした。この際、文化学園大学服装学部服装造形学科クリエイティブデザインコース卒業研究展と同時開催とし、ファッションを学ぶ若い学生やその関係者らの集客効果も狙った。

出展作品は制作した5体の作品に加え、制作者の異なる6体の衣服を追加した衣服11点、その他にも友禅染や反物、組紐といった染織工芸作品や染色実験試料等、豊富なバリエーションの28点で、いずれも合成貝紫染料で染色した作品である。

また、広報活動の一環としてポスターの制作も行った（図9）。矩形と円の組み合わせの中に、漢字の「貝」を配したシンプルなグラフィックである。これらの図形の縁は紫の濃淡が重なり、同一の染料から無限の表情が生まれる様をイメージしている。

2．実施結果

受付にて記帳していただいた人数は97名である。記帳しない来場者も多く、実数はこれを大いに上回ることが予想される。また、同時開催の卒業研究展に参加した学生も自身らの展示を運営する傍らで作品を目にしていた様子が確認されている。とは言え本展示会は来場者数も多いとは言い切れず、またメディアへの働きかけも行ったが、取り上げられることはなかった。各メディアへの積極的な働きかけや、インターネット上での呼びかけ等、限られた予算と時間の中で、効果を最大限に発揮する手段の検討が求められる。

しかし、来場者からは、この展示で初めて貝紫染色及び合成貝紫染色を知ったという意見や、同じ染料でも素材や染色方法によって多様な印象を与えることに驚いたといった意見を頂くことができた。この展示会が現代人にとって貝紫染色との出会いとなり、興味をもつきっかけとなることができたと考えられ、今後の活動の大きな一歩と言えるだろう。

Ⅵ　まとめ

現代ファッションという観点で貝紫染色について考えると、その現状は芳しいものではない。貝紫は希少性や染色の難易度のために、流通といういわばファッションの中心世界からは遠ざかり、染織工芸品や和装小物の中でわずかに見られる程度である。洋装が一般化した現在、貝紫染色された衣服を身に纏う機会は殆どないといっても過言ではない。

そうした中で、合成貝紫染料の開発が果たす役割は大きい。合成貝紫染料研究の今後の進展次第では、貝紫は染料の一つとして一般的に用いられる可能性を含んでいるのである。そうした未来に向け、現代のファッションとしての貝紫の在り様を提示し、現代人が貝紫染色を身近に感じてもらうことを目的として、デザイン提案及び展示会開催を行った。

合成貝紫染色を現代ファッションとして表現することは、ファッションデザイナーから厳しい評価を得ることで、作品の客観的評価を認識するに至った。これにより、作品の改良や展示方法の工夫が可能となるばかりではなく、今後の作品制作における課題を見出すことができた。また、合成貝紫の認知度向上を目指した展示会に関しては、集客の面において課題の残る結果となったが、来場者に強く印象付けることができたと考えられる。

貝紫染色は古来より世界各地において行われてきた、染織史上無視することのできない染色方法である。貝紫染色による現代ファッションの実現に向け、今後更なる研究に加え、自身らの感性と技術の研鑽が必要であると考える。

図３　デザイン１

図４　デザイン２

図５　デザイン３

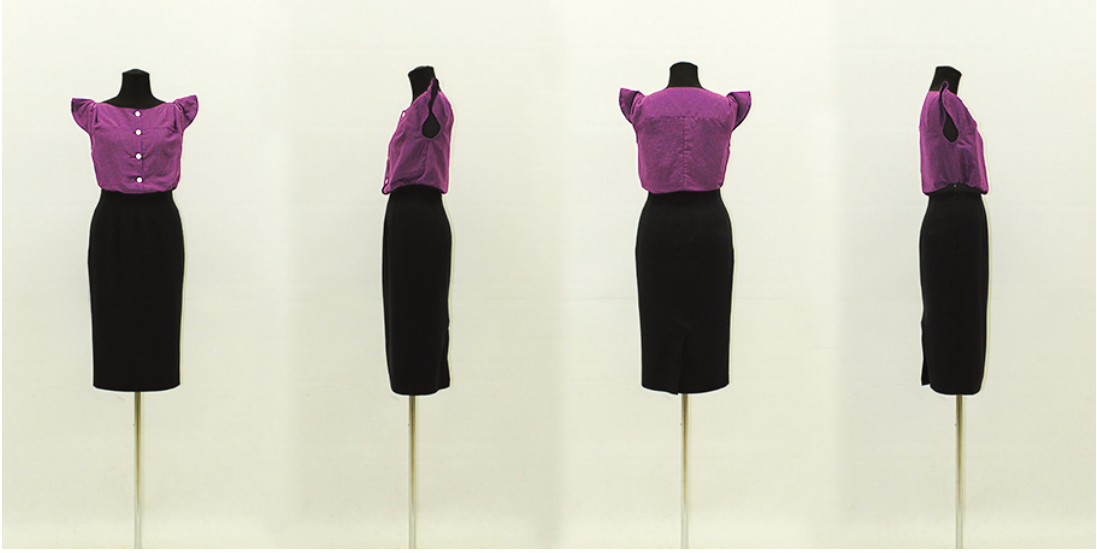

図６　デザイン４

図７　デザイン５

図８　展示会風景

図９　ポスターデザイン

謝辞

本研究は、文化ファッション研究機構「貝紫染織共同研究」を足掛かりとして行われたものであることをここに記し、謝意を表します。

研究から展示会の実施まで御尽力くださいました森川陽教授、明星大学の澤田忠信教授、本学大学院非常勤講師の齋藤光彌教授、本学の香川幸子教授、貴重なアドバイスを頂戴しましたデザイナーの皆様、展示会にご参加くださいました出展者の皆様へ、重ねて感謝申し上げます。

注・引用文献

1） 吉岡常雄『帝王紫探訪』紫紅社、p.11、1983 年
2） 秋山眞和「幻の染め“貝紫”の再現」化学工学 56、10、pp.709-711、1992 年
鳥本昇「古代の色を蘇らせる―藍・紅花・紫根・貝紫―」化学と教育 40、1、p.30、1992 年等
3） 寺田貴子「貝紫に関するフィールド調査」活水論文集健康生活学部・生活学科編 48、pp.51-62、2005 年
4） 日吉芳朗、藤瀬裕「化学教材としての貝紫の合成」化学と教育 44、11、pp.731-731、1996 年
5） 落合洋介、渡邉和希ら「古代紫（チリアンパープル）の合成と染色」日本シルク学会研究発表要旨集録 15、pp.104-105、2006 年
6） 日吉芳朗「貝紫と化学教育」化学史研究 19、p.294、1992 年
7） 吉岡幸雄ら『天平の赤・帝王の紫　幻の色を求めて　吉岡常雄の仕事』紫紅社、p.53、1989 年
8） 吉見逸郎「貝紫についての一考察」国際服飾学会誌、1、pp.67-68、1984 年
9） 吉岡幸雄ら『天平の赤・帝王の紫　幻の色を求めて　吉岡常雄の仕事』紫紅社、pp.53-54、1989 年
10）吉岡常雄『帝王紫探訪』紫紅社、pp.24-33, 47-48、1983 年
11）吉岡常雄『帝王紫探訪』紫紅社、pp.34-35, 48、1983 年
12）佐々木久育「メキシコ・オアハカ州ビノテパ・デ・ドン・ルイス村における貝紫染スカートの紋職組織について」天理参考館報、6、pp.101-106、1998 年
13）寺田貴子「貝紫に関するフィールド調査」活水論文集健康生活学部・生活学科編 48、p.57、2005 年
14）吉見逸郎「貝紫についての一考察」国際服飾学会誌、1、p.68、1984 年
15）吉見逸郎「貝紫についての一考察」国際服飾学会誌、1、pp.69-70、1984 年
16）寺田貴子「貝紫に関するフィールド調査」活水論文集健康生活学部・生活学科編 48、p.53、2005 年
17）佐賀県教育委員会「吉野ヶ里　神埼工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」佐賀県文化財調査報告書、113、1992 年
18）吉岡常雄『帝王紫探訪』紫紅社、p.53、1983 年
19）William Cole, “A Letter from Mr William Cole of Bristol, to the Phil. Society of Oxford; containing his Observations on the Purple Fish”, *Phil.Trans.Roy.Soc.* 15, 1278-1286, 1685
20）Friedlander, P “Uber den Farbstoff des antiken Purpurs aus murex brandaris” *Ber. Dtsch. Chem. Ges.* 42, 765-770, 1909
21）貝紫及び合成工程の化学式は明星大学澤田教授によるものである。
22）実験は明星大学澤田教授らによって行われた。論文としては［落合洋介、渡邉和希ら「古代紫（チリアンパープル）の合成と染色」日本シルク学会研究発表要旨集録 15、pp.104-105、2006 年］に詳しい。
23）落合洋介、渡邉和希ら「古代紫（チリアンパープル）の合成と染色」日本シルク学会研究発表要旨集録 15、pp.104-105、2006 年
24）「伝統染織新紀行 16　紫工房〈貝紫染めの染色手順〉染め人稲岡良彦」染色 α 2002 年 5 月号、p.33
25）島崎千江子、吉野鈴子「インターネット通販における衣服の素材感について」大手前短期大学研究集録 27、2007 年、p.46
26）小形道正「ファッション・デザイナーと社会の感覚―山本耀司と虚構の時代―」ファッションビジネス学会誌 17、2012 年、p.69
27）「2012-13 FALL&WINTER PERFECT TREND BOOK」『FASHION NEWS』2012 年 5 月号、p.113
28）『図録　貝紫展　合成貝紫による染織および作品制作』文化学園大学文化ファッション研究機構貝紫染織共同研究グループ、2013 年